

中部大学新入生の学科選択満足度の分析 —入学年度、学部、学科による比較と影響要因の検討—

小塩 真司・願興寺礼子・桐山 雅子

1 問題

大学の運営にとって、学生の満足度を向上させることは重要な課題である。しかし、学生たちが実際にどの程度の満足度を有しているのか、また満足度は入学年度によって変化しているか、学部・学科によって差がみられるのか、そしてどのような要因が満足度に影響しているのかなど、不明瞭な点も多い。

毎年中部大学では、恵那研修において、新入生を対象に学生相談室アンケートが実施されている。この中には多様な質問が含まれており、その中のひとつに「学科選択満足度」がある。この項目は、「中部大学に入学し、現在の学科を選んだことについてあなたの気持ちは」という質問に対し、「満足である」から「不満である」までに「その他」を加えた6つの選択肢から1つを選ぶ形式で測定されたものである。これまで筆者らは、学生相談室アンケートを分析することで、学生の満足度に関連するいくつかの知見を得てきた。

小塩・願興寺・桐山(2006)は、2006年度に新入生を対象に実施された学生相談室アンケートの中から、進学目標、学部・学科選択理由、学業への取り組み方と満足度を取り上げ、学部間で差がみられるかどうかを検討した。そして、多数の新入生は何らかの進学目標を有していることや、自分自身で本学の学科を選択して入学してくる傾向が強いこと、全学で約4割の学生が単位取得の不安を感じていることとともに、学部別で満足度を比較した場合には、経営情報学部の満足度がやや低い傾向にあることを示した。

小塩・願興寺・桐山(2007)は、人文学部全体および学科ごとに、新入生の学科選択理由の入学年度による変化を検討した。そして人文学部全体として「自分の適性」を理由に挙げる者が多いこと、また学科によって「就職や将来性」という理由の選択率が大きく異なること、総合的な満足度は比較的高いことなどを明らかにした。また引き続き小塩・願興寺・桐山(2008)は、2007年度までの人文学部新入生のデータを用いて、学科選択理由の変化と学科選択満足度に影響を及ぼす要因について検討を行っている。そこでは、2003年度の新入生以降では学科による満足度の差が少なくなり、人文学部新入生の満足度が全体に上昇する傾向にあることが示された。また学科選択理由が学科選択満足度

に及ぼす影響を検討したところ、自分の適性や就職・将来性を考慮して学科選択を行うことは学科選択満足度を高め、希望の学科に入れないことや合格の可能性を考慮した学科選択、教師の意見を聞き入れた学科選択は学科選択満足度を低める傾向にあることが示された。

本研究の目的は、これまで人文学部を中心として分析してきた学科選択理由の入学年度による変化と、学科選択満足度に影響を及ぼす要因について、大学全体のデータを用いて検討することである。入学年度と学部・学科別の満足度得点については、今後の大学・学部・学科運営を議論するための基礎的なデータを提供することに主眼をおく。また、学科選択満足度に影響を及ぼす要因については、中部大学を選んだ理由(大学選択理由)と、進学した学科を選択した理由(学科選択理由)の双方に注目する。さらに、入学年度と入学した学科の効果を統制した後において、これらが満足度にどのような影響を与えているのかを検討する。

2 方法

分析に用いたのは、1998年度から2008年度までの11年間に中部大学に入学した学生21339名分のデータである。なお表1には、入学年度別および全年度の分析対象者数も示されている。

今回、分析の対象とした質問は以下のとおりである。

第1に、先に述べた学科選択満足度である。「中部大学に入学し、現在の学科を選んだことについてあなたの気持ちは」という質問に対し、「満足である」から「不満である」までに「その他」を加えた6つの選択肢から1つを選ぶ形式で測定されている。ここでは「不満である」を1点、「どちらでもない」と「その他」を3点、「満足である」を5点とする、5点満点に換算して用いた。表1に、各入学年度およびすべての入学年度(11年間)の平均値・標準偏差を示す。なお、入学年度による満足度の平均値の差を検討するために分散分析を行ったところ、有意であった($F(10,21328) = 6.95, p < .001$)。分散分析が有意であったことから多重比較を行ったところ、2004年度の得点が1998年度から2003年度および2006年度よりも高いこと、1998年度と2000年度よりも2007年度および2008年度の方が高

いことが示された。しかし2004年度と1998年度の差も0.21と小さく、全年度を通して大きな差があるとは言えないだろう。

表1 入学年度別および全年度（11年間）の
学科選択満足度の平均値と標準偏差お
よび分析対象者数

入学年度	平均値	標準偏差	人数
1998	3.71	1.07	1960
1999	3.79	1.01	1810
2000	3.74	1.05	1730
2001	3.80	1.04	1980
2002	3.79	1.03	1995
2003	3.81	1.07	2006
2004	3.92	0.99	1825
2005	3.82	1.03	1905
2006	3.77	1.06	1979
2007	3.88	0.98	1969
2008	3.86	1.00	2180
全年度	3.81	1.03	21339

表2 大学選択理由および学科選択理由の項目内容

- (1) 中部大学を選んだ理由[大学選択理由]
1. 大学の特徴、学科の内容をよく知っていて、良いと思ったから
 2. 通学距離、家庭の事情でなんとなく
 3. 学力を考えて
 4. 本当は他の大学へ進学したかったが、希望の大学に入れなかった
 5. 友達にこの大学へ進学する者が多かった
 6. 先生や親にすすめられた
 7. 推薦入学ができた
 8. など
 9. その他
- (2) いまの学科を選んだのは[学科選択理由]
1. 自分の適性を考えて自分で
 2. 就職や将来性を考えて自分で
 3. 合格の可能性を考えて
 4. 親や家族にすすめられて
 5. 学校の教師の意見で
 6. 友人の影響を受けて
 7. 希望の学科に入れなかった
 8. その他

学科選択満足度に影響を及ぼす要因として取り上げる、大学選択理由と学科選択理由の項目内容は表2に示すとおりである。なお、分析にはそれぞれの「その他」項目は含めなかった。本研究では、これらの理由の年度による変化や学科による差については報告しない。これらの項目の詳細については、小塩・願興寺・桐山（2005, 2006, 2007, 2008）を参照してほしい。

3 結果と考察

3.1 学部と入学年度ごとの満足度得点

図1に、入学年度と学部ごとの満足度得点を示す。なお、1998年度においては、工学部、経営情報学部、人文学部の平均値はほぼ同じであり、グラフが重なっている。

これらの得点について、入学年度と学部による2要因の分散分析を行ったところ、交互作用が有意であった（ $F(39, 21283) = 4.412, p < .01$ ）。単純主効果の検定を行ったところ、応用生物学部における入学年度の単純主効果（ $F(7, 21283) = 5.70, p < .01$ ）、経営情報学部における入学年度の単純主効果（ $F(7, 21283) = 2.72, p < .01$ ）、工学部における入学年度の単純主効果（ $F(7, 21283) = 3.31, p < .01$ ）、国際関係学部における入学年度の単純主効果（ $F(7, 21283) = 5.72, p < .01$ ）、人文学部における入学年度の単純主効果（ $F(7, 21283) = 5.21, p < .01$ ）、生命健康科学部における入学年度の単純主効果（ $F(7, 21283) = 3.91, p < .001$ ）が有意であった。また、1998年度と2000年度を除くすべての入学年度において、学部の単純主効果が有意であった（1999年度： $F(3, 21283) = 7.35, p < .001$ 、2001年度： $F(4, 21283) = 22.99, p < .001$ 、2002年度： $F(4, 21283) = 17.01, p < .001$ 、2003年度： $F(4, 21283) = 11.64, p < .001$ 、2004年度： $F(4, 21283) = 7.45, p < .001$ 、2005年度： $F(4, 21283) = 4.55, p < .01$ 、2006年度： $F(5, 21283) = 4.35, p < .01$ 、2007年度： $F(5, 21283) = 23.01, p < .001$ 、2008年度： $F(6, 21283) = 15.65, p < .001$ ）。

学部ごとの入学年度による多重比較の結果をふまえると、以下のような特徴がわかる。

工学部については2004年度の満足度が1998年度、1999年度、2000年度、2008年度よりも有意に高いことが示された。工学部はすべての入学年度を通じて大きな変化を示しているわけではないが、2004年度から徐々に満足度が低下傾向にある。

国際関係学部については、2004年度と2007年度の満足度が他の年度に比べ高い傾向にあった。国際関係学部の満足度は入学年度により大きく上下に揺れ動くのが特徴的である。

経営情報学部については、1999年度の満足度が2002年度、2007年度、2008年度よりも有意に高かった。経営情報学部の満足度は、特に2002年度以降、他の学部と比べて低い位置にあり続けている点が特徴的である。

人文学部については、2004年度および2007年度、2008年度が1998年度や2001年度よりも高いことが示された。人文学部の満足度は2001年度にもっとも低くなった後は、上下動を繰り返しながらやや上昇する傾向にある。

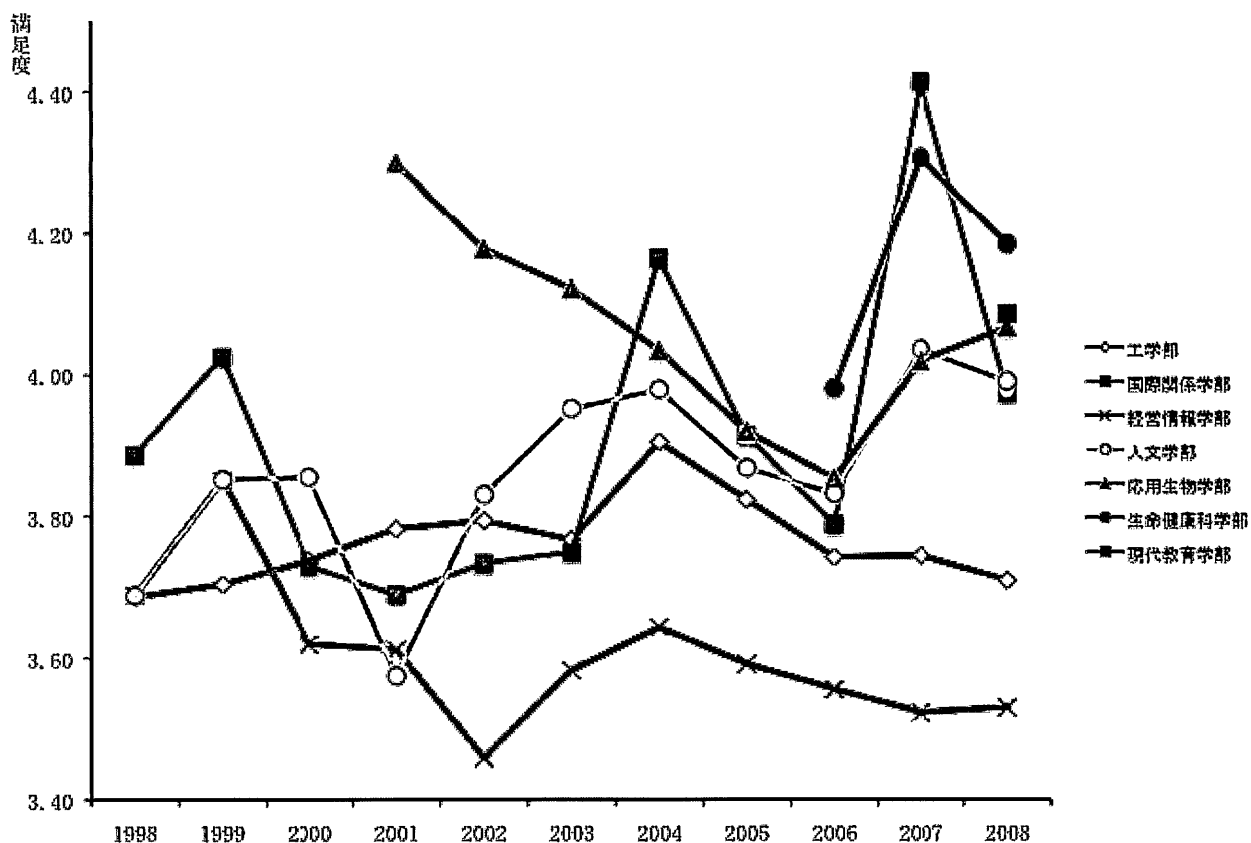


図1 入学年度および学部別の満足度得点

応用生物学部については、2001年度から2006年度にかけて満足度が低下していき、2007年度、2008年度については上昇していた。ただし、2007年度と2008年度の得点と2006年度の得点の間には、有意な差はみられなかった。

生命健康科学部については、2006年度よりも2007年度の方が有意に高い満足度であったが、2008年度はいずれの年度とのあいだにも有意な差はみられなかった。学部開設以来、生命健康科学部に入学した新入生の満足度は、他の学部比べて高い傾向にある。

なお現代教育学部については、2008年度に開設されたこともあり、以前の年度との比較を行うことはできない。そこで、2008年度における学部間の多重比較を行った。その結果、経営情報学部と工学部がその他の学部と比べ、有意に低い満足度であることが示された。生命健康科学部、現代教育学部、応用生物学部、人文学部、国際関係学部の間には有意な差はみられなかった。

以上のように、満足度の入学年度ごとの得点は、それぞれの学部によって特徴的な動きをしていると言える。次には、より詳細な単位として学科を取り上げ、満足度の得点を比較してみたい。

3.2 入学年度と学科ごとの満足度得点

表3に、入学年度と学科別の満足度得点を示す。この表では、各入学年度において、満足度の平均値が高かった順に学科を並べてある。また2008年度の右側には、すべての入学年度における各学科の満足度の平均値と標準偏差、分析対象者数を示した。なお、入学年度と学科で満足度得点の分散分析を行ったところ、交互作用が有意であった ($F(156, 21149) = 2.93, p < .001$)。しかしここでは、結果が煩雑になるためにこれ以上の検定は行わないことにする。

まず全体を通して言えることは、新規に開設された学科は比較的満足度が高く、その後に満足度が低下していく傾向にあるということである。たとえば応用生物化学科 (FR) と環境生物科学科 (FS) の満足度は、学部が開設された2001年度から徐々に満足度得点の下がり、2007年度には全学平均値の近くにまで至っている (なお、応用生物化学科については、2008年度には順位を4位にまで戻している)。同様の傾向は歴史地理学科 (HH) においてもみられる。歴史地理学科が開設された2004年度より、満足度の平均値は4.02、3.84、3.61、3.80、3.68と低下傾向にある。

しかしながら、学科が新規に開設されてから、年度を経ても満足度があまり低下しない学科も存在する。それは、複数年度において平均して高い満足度を得て

表3 入学年度と学科別の満足度平均値および標準偏差

入学年度		1998			1999			2000			2001			2002			2003		
順位	学科	M	SD	学科	M	SD	学科	M	SD	学科	M	SD	学科	M	SD	学科	M	SD	
1	EA	4.31	0.99	HF	4.28	0.94	EA	4.32	0.79	FR	4.35	0.77	HW	4.30	0.75	EA	4.30	0.87	
2	NL	3.93	1.12	EA	4.08	0.93	HF	4.05	0.91	FS	4.24	0.85	FR	4.18	0.87	HW	4.20	0.84	
3	NN	3.85	0.93	NN	4.03	0.87	EP	3.89	1.01	EA	4.05	0.98	FS	4.18	0.90	FR	4.19	0.89	
4	HJ	3.82	1.10	NL	4.02	0.94	HI	3.87	1.11	EP	3.98	1.02	EP	4.17	0.80	EP	4.13	1.00	
5	EC	3.77	1.02	HI	3.88	0.98	NL	3.84	1.10	EM	3.85	0.98	EA	3.99	1.00	FS	4.06	0.96	
6	EK	3.72	1.13	BG	3.85	1.01	EC	3.84	1.01	NL	3.70	1.02	HI	3.99	1.09	HF	4.02	1.01	
7	BG	3.69	1.03	EK	3.80	0.96	EE	3.69	1.19	EK	3.69	1.08	EC	3.83	1.03	HI	3.87	1.16	
8	HI	3.65	1.03	EE	3.77	1.06	HJ	3.65	0.96	NN	3.68	1.12	EM	3.82	1.01	EK	3.78	1.08	
9	EE	3.65	1.03	ED	3.72	0.99	NN	3.62	0.99	EE	3.67	1.17	HF	3.76	1.07	NN	3.75	1.09	
10	HF	3.60	1.05	EC	3.66	0.98	BG	3.62	0.96	HF	3.62	1.07	NN	3.75	1.19	NL	3.75	1.15	
11	EM	3.60	1.08	EM	3.54	1.03	EM	3.55	1.05	BG	3.61	0.99	NL	3.72	1.01	BG	3.72	0.93	
12	EB	3.51	0.98	HJ	3.53	1.01	ED	3.53	1.06	HI	3.57	1.28	EK	3.68	1.04	HJ	3.72	1.16	
13	ED	3.42	1.07	EB	3.32	1.01	EK	3.44	1.18	EC	3.55	1.19	EE	3.61	0.97	ED	3.56	0.98	
14									HJ	3.55	0.95	BG	3.58	1.01	EM	3.49	1.07		
15									ED	3.50	0.91	ED	3.46	1.07	EE	3.44	1.12		
16												HJ	3.40	1.07	EC	3.35	1.14		
17												BH	3.09	0.95	BH	3.32	1.16		
全学		3.71	1.07	全学	3.79	1.01	全学	3.74	1.05	全学	3.80	1.04	全学	3.79	1.03	全学	3.81	1.07	

入学年度		2004			2005			2006			2007			2008			全年度			人数
順位	学科	M	SD	学科	M	SD	学科	M	SD	学科	M	SD	学科	M	SD	学科	M	SD		
1	NN	4.35	0.68	EA	4.15	0.85	LK	4.32	0.96	NN	4.42	0.82	HW	4.33	0.80	LK	4.31	0.89	320	
2	EA	4.17	0.87	HF	4.03	0.98	EA	4.20	0.86	NL	4.39	0.80	LK	4.28	0.85	HW	4.18	0.87	612	
3	HW	4.16	0.81	HW	4.00	1.04	HW	4.12	0.94	LK	4.34	0.89	FT	4.17	0.85	PY	4.16	0.79	50	
4	FS	4.14	0.85	FT	3.99	1.00	FR	4.06	0.93	LB	4.20	0.78	FR	4.16	0.84	EA	4.12	0.94	1526	
5	HF	4.03	1.09	FS	3.98	1.05	EK	3.97	0.94	HW	4.18	0.86	PY	4.16	0.79	FR	4.09	0.92	923	
6	HH	4.02	1.01	EM	3.94	1.08	HF	3.90	1.06	FT	4.16	0.85	HF	4.09	0.95	FS	4.04	0.96	915	
7	EP	4.02	0.88	NN	3.94	1.01	NN	3.85	1.03	HF	4.13	0.96	LB	4.04	0.90	PJ	4.04	1.15	82	
8	NL	4.01	1.08	NL	3.89	0.99	HJ	3.82	1.11	HJ	4.09	0.94	PJ	4.04	1.15	FT	3.98	0.96	351	
9	EK	3.98	0.93	HJ	3.87	1.04	FS	3.80	1.07	HI	3.99	1.08	NL	3.98	0.91	EP	3.96	0.98	1189	
10	FR	3.93	0.98	EP	3.86	0.95	EP	3.74	1.18	FS	3.97	0.91	NN	3.96	1.06	HF	3.94	1.03	815	
11	HJ	3.91	1.03	HH	3.84	1.12	NL	3.73	1.09	FR	3.97	0.93	HI	3.96	0.94	LB	3.91	0.99	187	
12	EM	3.91	1.02	FR	3.80	1.03	EM	3.71	0.99	EK	3.94	0.87	EP	3.94	0.98	NN	3.90	1.02	887	
13	HI	3.80	1.06	EE	3.78	0.96	FT	3.68	1.03	EA	3.92	1.03	HJ	3.91	1.00	NL	3.89	1.04	882	
14	ED	3.79	0.98	EK	3.74	1.14	HI	3.67	1.09	EP	3.86	0.90	FS	3.90	1.02	HI	3.80	1.08	921	
15	BG	3.72	0.93	EC	3.68	1.07	ED	3.67	1.03	HH	3.80	0.97	EA	3.82	1.04	HH	3.77	1.06	413	
16	EC	3.71	1.00	BH	3.61	1.02	HH	3.61	1.21	EM	3.78	1.02	EC	3.79	0.88	EK	3.75	1.06	1148	
17	EE	3.62	1.14	HI	3.60	1.01	BH	3.59	0.97	BG	3.72	0.95	EK	3.72	1.11	HJ	3.74	1.05	972	
18	BH	3.53	1.12	BG	3.57	1.01	LB	3.56	1.14	ED	3.66	0.95	HH	3.68	0.97	EM	3.70	1.04	2178	
19				ED	3.32	0.90	BG	3.52	0.99	EE	3.42	1.02	EE	3.64	1.10	BG	3.66	0.98	2229	
20							EE	3.49	1.09	BH	3.30	0.88	BG	3.62	0.88	EE	3.63	1.08	1330	
21							EC	3.11	1.12	EC	3.26	0.91	EM	3.62	1.02	EC	3.63	1.06	1022	
22												BH	3.41	1.00	ED	3.54	1.01	1411		
23												ED	3.36	0.96	BH	3.43	1.02	817		
24															EB	3.43	1.00	159		
全学		3.92	0.99	全学	3.82	1.03	全学	3.77	1.06	全学	3.88	0.98	全学	3.86	1.00	全学	3.81	1.03	21339	

<工学部>

EM	機械工学科
EE	電気システム工学科（電気工学科）
ED	電子情報工学科（電子工学科）
EC	都市建設工学科（土木工学科）
EA	建築学科
EK	応用化学科
EP	情報工学科
EB	工業物理学科（2000年度より情報工学科へ）

<人文学部>

HJ	日本語日本文化学科
HF	英語英米文化学科
HI	コミュニケーション学科
HW	心理学科
HH	歴史地理学科

<国際関係学部>

NN	国際関係学科
NL	国際文化学科

<応用生物学部>

FR	応用生物化学科
FS	環境生物科学科
FT	食品栄養科学科

<経営情報学部>

BG	経営情報学科
BH	経営学科

<生命健康科学部>

LB	生命医科学科
LK	保健看護学科

<現代教育学部>

PY	幼児教育学科
PJ	児童教育学科

※各年度において、平均値の高い学科順に並べてある。

※平均値および標準偏差の欄にある横線は、全学平均値の位置を表す。

いる、保健看護学科（LK）、心理学科（HW）、そして建築学科（EA）である。これらの学科がなぜ、他の学科よりも高い学生の満足度を維持し続けることができているのかについては、本研究の結果だけで結論づけることはできない。この要因がどこにあるのかについては、詳細な分析が必要とされるであろう。なお、建築学科については2007年度、2008年度の満足度がそれ以前に比べて明らかに低下している。この要因もあ

わせて検討していくことで、満足度に影響を及ぼす要因についてさらなる示唆が得られるかもしれない。

国際関係学部の国際関係学科（NN）と国際文化学科（NL）の得点は、入学年度によって大きく変動する傾向にある。ひとつの要因としては、それぞれの学科への毎年の入学者数が比較的少ないために、学科内の些細な要因が満足度に大きく反映する傾向にあるということが考えられる。また、入学年度によって大き

く異なる質の学生が入学してくるのかもしれない。ただしこれらは推測の範囲を超えるわけではないので、詳細な検討が必要とされる。

経営情報学科（BG）および経営学科（BH）は、いずれの年度についても比較的満足度が低い傾向にある。図1でも、経営情報学部は他の学部比べて満足度が低い傾向にあることが示されたが、2つの学科いずれについても満足度が低い傾向にあることが示された。特に、経営学科については、学科が開設された2002年度から現在まで、他学科に比較して満足度がずっと低い傾向にある。何がこのような結果を生み出す要因であるかは分からないが、なんらかの対策を必要としているのかもしれない。

それぞれの学科においてスタッフは、カリキュラムの変更や人員の増減、受験層の変化など、さまざまな変化を経験していると考えられる。各学科における年度による変化と、本研究の結果を照らし合わせるこ

で、各学科特有の満足度に影響する要因をさらに絞り込むことが可能となるであろう。

3.3 大学選択理由と学科選択理由が満足度に及ぼす影響

次に、大学選択理由と学科選択理由が学科選択満足度に及ぼす影響を検討した。

まず、大学選択理由と学科選択理由は、当てはまる項目を選択する形式で測定されている（複数選択可）。そこで、選択を1、非選択を0としてコード化した。また、入学年度や所属学科の影響を統制するために、以下のような操作を行った。

入学年度ごとの平均値を算出し、平均値が最も低い入学年度（1998年度）から最も高い入学年度（2004年度）までに対し、1から11までのダミー得点を与えた。次に、全入学年度を通じた学科ごとの平均値から、最も低い平均値であった学科（工業物理学科）から最も

表4 階層的重回帰分析の結果

	目的変数：学科選択満足度				
	β	R^2	ΔR^2	r	ρ
STEP 1：年度学科					
入学年度	.01	.04 *	.04 *	.06 *	.05 *
所属学科	.14 *			.20 *	.21 *
STEP 2：大学選択理由					
1. 良いと思った	.17 *	.13 *	.09 *	.27 *	.28 *
2. 家庭の事情	.01			.02	.02
3. 学力を考えて	.05 *			.06 *	.05 *
4. 希望の大学に入れなかった	-.10 *			-.13 *	-.12 *
5. 友達	.00			-.01	-.02
6. おすすめられた	.03 *			.02 *	.02
7. 推薦入学	-.04 *			-.01	-.02
8. なんとなく	-.10 *			-.15 *	-.14 *
STEP 3：学科選択理由					
1. 自分の適性	.16 *	.18 *	.05 *	.21 *	.21 *
2. 就職や将来性	.10 *			.11 *	.10 *
3. 合格の可能性	-.05 *			-.13 *	-.14 *
4. 親に奨められて	.00			-.02	-.02
5. 教師の意見	-.03 *			-.07 *	-.07 *
6. 友人の影響	-.02			-.04 *	-.04 *
7. 希望の学科に入れなかった	-.10 *			-.19 *	-.18 *

* $p < .001$

※ β はSTEP 3の値である。

※ r ：ピアソンの積率相関係数、 ρ ：スピアマンの順位相関係数

高い平均値であった学科（保健看護学科）に対して、1から24のダミー得点を与えた。

そして、学科満足度を従属変数、入学年度、所属学科、大学選択理由、学科選択理由を独立変数とした階層的重回帰分析を行った。ステップ1として入学年度と所属学科を投入し、ステップ2に大学選択理由、そしてステップ3に学科選択理由を投入した。また、各独立変数と従属変数との間のピアソンの積率相関係数およびスピアマンの順位相関係数を算出した。これらの結果を表4に示す。なお、独立変数間の多重共線性を検討するためにVIF（Variance Inflation Factor）を算出したところ、いずれの値も1.60未満であったため、多重共線性の問題はないと判断された。

階層的重回帰分析の結果、ステップ2およびステップ3それぞれの R^2 の変化量（ ΔR^2 ）が有意であった。従って、入学年度や所属学科の効果を統制しても、大学選択理由が満足度に対して有意な影響力をもつこと、さらに大学選択理由を統制しても、学科選択理由が満足度に対して有意な影響力をもつことが示された。

次に、それぞれの独立変数の内容に注目する。まず、入学年度については、有意な標準偏回帰係数が得られなかったことから、表1にも示したように、中部大学全体としては、入学年度による満足度の違いはほとんどみられないということが言える。また所属学科の影響力が有意であったことから、どの学科に所属するかによって、満足度はある程度影響を受けるということが言える。

大学選択理由のうち「1. 大学の特徴、学科の内容をよく知っていて、良いと思ったから」、学科選択理由の「1. 自分の適性を考えて自分で」「2. 就職や将来性を考えて自分で」を選択する学生ほど、満足度がより高くなる傾向にあることが示された。また、大学選択理由の「4. 本当は他の大学へ進学したかったが、希望の大学に入れなかったの」「8. なんとなく」、学科選択理由の「7. 希望の学科に入れなかったの」は満足度を低下させる方向に影響を与える項目であった。これらの結果から、自ら積極的に大学・学科選択を行うことは満足度を高め、消極的に選択を行うことは満足度を低める方向に影響を及ぼすことが考えられる。

大学選択理由の「3. 学力を考えて」が、小さな値ではあるが満足度に対して有意な正の影響を示したのに対して、学科選択理由の「3. 合格の可能性を考えて」は同程度の負の影響を示したという点は興味深い。大学を選択する際に学力を考慮することと、学科を選択するときに学力を考慮することは、異なる意味をもつということなのかもしれない。たとえば、学びたいことが確定している学生にとって、同じ学科をも

つ複数の大学の中から自分自身の学力に見合った大学を選択することは、それほど否定的な意識に結びつかないが、その一方で、学科そのものの選択を学力と合格の可能性を考慮して選択するということは、自分自身の興味・関心から離れた学科選択を行うということにつながり、このことが満足度に負の影響を与えるということも考えられる。

その他、標準偏回帰係数（ β ）は低い値であるが有意であった指標としては、大学選択理由の「6. 先生や親にすすめられたので」が満足度に対して正、「7. 推薦入学ができたので」が負の影響、学科選択理由の「5. 学校の教師の意見で」が負の影響を示していた。親や教師が大学を薦めることは満足度を高める方向に影響するが、教師が学科を薦めることは満足度を低める方向に影響するといえる。これらについてはもちろんより詳細な分析が必要であるが、推薦入学や教師の意見に基づく学科選択が満足度の低下に結びつく可能性があることについては、受験生・新入生への対応を行う際に考慮に入れておく必要があるかもしれない。

4 まとめ

本研究では、学生相談室アンケートの中から学科選択満足度に注目して分析を行った。分析を行った学科選択満足度は「中部大学に入学し、現在の学科を選んだことについてあなたの気持ちは」という質問項目であり、学科のみならず中部大学そのものを選択したことも含んだ内容となっていると考えられる。

そして本研究では第1に、学部および学科と入学年度別の学科選択満足度得点を比較した。分析結果からは、それぞれの学部・学科によって入学年度ごとに特徴的な満足度の変化を示すことがうかがえた。それぞれの学部・学科には、年度によってさまざまな変化が生じていると考えられるため、本研究の結果のみからその要因を十分に論じることができないが、各学部・学科の運営と照らし合わせることで多くの知見が得られることが期待される。

本研究では第2に、学科や入学年度の要因を統制した上で、学科選択満足度に影響を及ぼす要因について検討を行った。そして、以下のような知見が得られた。

- (1) 大学の特徴や学科の内容を十分に把握して入学してくる学生は、満足度が高い傾向にある。
- (2) 自分の適性を考え、大学卒業後の将来を考えて学科を選択する学生は満足度が高い傾向にある。
- (3) 希望の大学に入れない、希望の学科に入れない、なんとなく学科を決めるといった消極的な大学・学科選択を行った学生は満足度が低い傾向にある。
- (4) 大学を自分の学力で選択することは満足度を高めるが、合格の可能性を考えて学科を選択すること

は満足度を低める方向に影響を与える。

- (5) 親や教師が大学を薦めることは満足度を高める方向にはたらくが、教師が学科を薦めることは満足度を低める方向に影響を与える。
- (6) 推薦入学で入学してきた学生は、満足度がやや低い傾向にある。

これらの結果は、入学年度や学科の違いを統制した上で得られた知見であることから、大学全体として言える傾向であると考えることができる。ただし、結果で示されたように、それぞれの要因の標準偏回帰係数の中には小さな値のものもあり、それぞれの要因の影響力および影響の方向性については絶対的なものではないことに留意しておく必要がある。また、階層的重回帰分析において考慮に入れた要因を総合しても、満足度に対して $R^2 = .18$ の影響力をもつにすぎない。新入生の満足度に対して影響を及ぼす要因は、本研究で挙げた以外にも多くのものがあるということも、十分

に認識しておく必要があるだろう。

文献

- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 (2005). 中部大学入学生における志望理由・目標・学科選択理由の変化 —1988年度入学生から2004年度入学生までの比較— 中部大学教育研究, 5, 15-24.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 (2006). 2006年度入学生における進学目標・学科選択理由・満足度の学部間比較 中部大学教育研究, 6, 87-92.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 (2007). 中部大学人文学部の新入生における学科選択理由の分析 人文学部研究論集 (中部大学), 17, 109-121.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 (2008). 中部大学人文学部の新入生における学科選択理由と学科選択満足度 中部大学人文学部研究論集, 19, 53-66.

准教授	人文学部	心理学科	小塩 真司
准教授	人文学部	心理学科	願興寺礼子
教授	学生相談室		桐山 雅子